
少年A

りの。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年A

【著者名】

りの。

【ノーテ】

N2204BA

【あらすじ】

ふいんきふんいきふいんきふんいき

心が平坦になる瞬間がある。つまり、自分の内側から、何か感情なり意見なりを取り出そうとすれば、そういう時に限つて、なにも、なんのつっかかりもない、つるつるとした心の表面を滑るだけで、なにも穿つことはできない状態なんだ。僕が小説を書く時、しばしばこういったことに遭遇する。なにかを書こうと思っても、頭には何も浮かんでこないし、これといった意見も感情もとくに書くことはないかな、なんて思つたりしてしまう。

幾人かは、たぶんそういう時は書かない方がいいんじゃないなんてアドバイスをしてくれるかもしれない。けれど、僕はそのまま書かない方でいると、おそらくそのまま書かないというのが続いて消えてしまう気がするんだ。

でもこれはおそらくは錯覚だと思う。人の心が、絶えず揺れ動き不安定な人の心が、その瞬間だけなんにもない平べったい状態に実質的になるなんてありえないからだ。つまり、僕が言いたいのは、少なくとも僕は、特にたいして何の活動もしていない僕は、自分の考えを出力するという人に意見を伝える最後のフェーズでなにか支障をきたしているんじゃないのかと思うんだ。そしてそれは長年使われていないファンに似ている。

だから、僕は新年の抱負をOUTPUTとすることにした。なんでも、感情でも、意見でも、知識でも、全て出力するのだ。

目の前を白い光に包まれる感覚を覚えながら、買つたばかりの厚い靴を履いて外に飛び出した。家でじつとしている事が出来なくなつた時、僕はいつも小さな堤防へ向かう。

軽くジョギングをしながら、僕は同じ事を何度も反芻してしまう。

OUTPUT、OUTPUT、OUTPUT。

僕はすこし偏つていて、一度なにか新しい、つまり自分をこの現実

から背中」と支えてくれるような考えを思いついてしまふと、そのことしか考えられなくなつちゃうんだ。錯覚にすぎないんだけどね。だからこそ、へとへとに疲れるまでその考えにしがみつっちゃうんだ。でも止められないもんなんだ。まいつたことにね。

堤防は相変わらずだつた。風が強い。コートの首元の隙間から冷たくて少し湿つた空気が入り込んでくる。

こここの空はいつも、八十点から八十六点だつた。生まれ育つた場所なんだけどね。小さいころ、友達の家でゲームをして、昼ごはんを家に食べに帰る途中で見た雲。あれだけは最高だつたね。というよりも、むしろそれが採点の基準になつてゐるんだけどね。

僕は瞳を魚眼にして、真ん中の水平ラインよりも少し空を多めに見る感じで堤防の延々と続く道と空を見てみた。相変わらず空は大きかつた。広いと言つよりも、その大きさに圧倒される。

いつか小さな子供のころ、大きな空を飛ぶ帆船が、この堤防で僕を迎えてくれる想像をしていた。大きな一本の深い茶色のマストがしつかりと立つていて、船頭にはひげがとても伸びた船長が大舵を切りながら僕の方へ向かつてくるんだ。そして問う。

「我々は君を迎えて来たが、君は一度この船に乗つてしまつと、一度とこの世界へは帰つて来れない。それでも君はこの船に乗るかね？」

小さいころ、僕は即答してうんと言つていた。もう少し大きくなつてこのことを思い出すと、少し考えたけれど、やはりうんと言つた。いまの僕はなんて答えるだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2204ba/>

少年A

2012年1月5日17時54分発行